

# 二〇一〇年度・学力検査問題【国語】

(高校第二回)

## 注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は14ページで一・二・三の三題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。  
また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に數えます。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「科学的な知見」<sup>※1</sup> という大雑把なくくりの中には、それが基礎科学なのか、応用科学なのか、成熟した分野のものか、まだ成長過程にあるような分野なのか、あるいはどんな手法で調べられたものなのかななどによつて、確度が大きく異なるものが混在している。ほぼ例外なく現実を説明できる非常に確度の高い法則のようなものから、その事象を説明する多くの仮説のうちの一つに過ぎないような確度の低いものまで、幅広く存在している。それらの確からしさを正確に把握して峻別<sup>べつ</sup>していくけば、少なくともより良い判断ができるはずである。

たとえば、近年、医学の世界で提唱されている evidence-based medicine (E-BM) <sup>※2</sup> という考え方では、そういった科学的知見の確度の違いを分かりやすく指標化しようとする試みが行われている。これは医学的な知見 (エビデンス) <sup>※3</sup> を、調査の規模や方法、または分析手法などによつて、かいそう化して順位付けし、臨床判断の参考にできるように整備することを一つの目標としている。同じ科学的な知見と言つても、より信頼できるデータはどれなのかを判断する基準を提供しようとする、意欲的な試みと言えるだろう。

しかし、こういった非専門家でも理解しやすい情報が、どんな科学的知見に対しても公開されている訳ではもちろんないし、科学的な情報の確度というものを単純に調査規模や分析方法といった画一的な視点で判断して良いのか、ということにも、実際は深刻な議論がある。一つの問題に対しても専門家の間でも意見が分かれることは非常に多く、

こういった科学的知見の確度の判定という現実的な困難さに忍び寄つて來るのが、いわゆる権威主義<sup>※4</sup>である。たとえばノーベル賞を取つたから、「ネイチャ」に載つた業績だから、有名大学の教授が言つてのことだから、といった権威の高さと情報の確度を同一視して判断するというやり方だ。この手法のりてんは、なんと言つても分かりやすいことで、現在の社会で「科学的な根拠」の確からしさを判断する方法として採用されているのは、この権威主義に基づいたものが主であると言わざるを得ないだろう。

もちろんこういった権威ある賞に選ばれたり、権威ある雑誌に論文が掲載されるためには、多くの専門家の厳しい審査があり、それに耐えてきた知見はそうでないものより強靭さ<sup>マッキン</sup>を持つてゐる傾向が一般的に認められることは、間違いのないことである。また、科学に限らず、音楽家であろうが、塗師<sup>ぬし</sup>であろうが、ヒヨコ鑑定士であろうが、専門家は非専門家よりもその対象をよく知つてゐる。だから、何事に関しても専門家の意見は参考にすべきである。それも間違いない。多少の不具合はあつたとしても、どんな指標も万能ではないし、権威主義による判断も分かりやすくある程度、役に立つなら、それで十分だといふ考え方もあるうかと思う。

しかし、なんと言えばよいのだろう。かつてアインシュタインは「何も考えずに権威を敬うこととは、眞実に対する最大の敵である」と述べ

そのような問題を非専門家が完全に理解し、それらを統合して専門家たちを上回る判断をすることは、現実的には相當に困難なことである。

たが、この権威主義による言説の確度の判定という手法には、<sup>2</sup>どこか拭い難い危うさが感じられる。それは人の心が持つ弱さと言えばいい

のか、人の心理とシステムが持つバグ、あるいはセキュリティホールとも言うべき弱点と関連した危うさである。端的に言えば、人は権威にすがりつき安心してしまいたい、そんな心理をどこかに持つてはいるのではないかと思うのだ。抛りどころのない「分からぬ」いう不安定な状態でいるよりは、とりあえず何かを信じて、その不安から逃れてしまいたいという指向性が、心のどこかに潜んでいる。権威主義は、そこに忍び込む。

そして行き過ぎた権威主義は、科学そのものを社会において特別な位置に置くことになる。「神託を担う科学」<sup>⑤</sup>である。どうぞくした権威主義の最たるもののが、科学に従事している研究者の言うことなら正しい、というような誤解であり（それはこのエッセイの信頼性もまた然りなのだが……）、また逆に科学に従事する者たちが、非専門家からの批判は無知に由来するものとして、聖典<sup>※7</sup>の寓言<sup>※8</sup>のような専門用語や科学論文の引用を披露することで、高圧的かつ一方的に封じ込めてしまうようなことも、「科学と社会の接点」ではよく見られる現象である。<sup>※8</sup>これまで何度も書いてきたように、科学の知見は決して100%の真実ではないにもかかわらず、である。

こういった人の不安と権威という構図は、宗教によく見られるものであり、「科学こそが、最も新しく、最も攻撃的で、最も教条的な宗教的制度」<sup>※9</sup>というホール・カール・ファイヤアーベントの言は、しさに富んでいる。「権威が言っているから正しい」というのは、本質的に妄言的な考え方であり、いかにびじを弄しようと、とどのつまりは

何かにしがみついているだけなのだ。

<sup>4</sup> また、もう一つ指摘しておかなければならないことは、権威主義が「科学の生命力」<sup>※10</sup>を蝕む性質を持つていてことだ。権威は人々の信頼から成り立っており、一度間違えるとそれは失墜し、地に落ちてしまう。権威と名のつくものは、王でも教会でも同じなのだろうが、この失墜への恐怖感が「硬直したもの」を生む。「権威は間違えられない」のだ。また、権威主義者に見られる典型的な特徴が、それを構築する体系から逸脱するものを頑なに認めない、という姿勢である。それは権威主義が本質的に人々の不安に応えるために存在しているという要素があるからであり、権威主義者はその世界観が瓦解<sup>※11</sup>し、その体系の中にある自分が信じた価値が崩壊する恐怖に耐えられないのである。

現代の民主主義国家では、宗教裁判にかけられたガリレオ・ガリレイの地動説のような、権威主義による強権的な異論の封じ込めはもう起こらないと信じたいが、特定の分野において「権威ある研究者」の間違った学説が、その人の存命の間はまかり通っているというようなことは、今もしばしば見られるようには思う。権威主義に陥ってしまえば、科学の可塑性、その生命力が毒されてしまうことは、その意味で、今も昔も変わらない。科学が「生きた」ものであるためには、その中の何物も「不動の真実」ではなく、それが修正され変わり得る可塑性を持たなければならない。権威主義はそれを蝕んでしまう。

そして、何より妄信的な権威主義と、自らの理性でこの世界の姿を解き明かそうとする科学は、その精神性において実はまったく正反対のものである。科学を支える理性主義の根底にあるのは、物事を先入

観なくあるがままに見て、自らの理性でその意味や仕組みを考えることである。

それは何かに頼つて安易に「正解」を得ることとは、根本的に真逆の行為だ。

だから、<sup>5</sup>科学には伽藍ではなく、バザールが似合う。権威ではなく、

個々の自由な営為の集合体なのだ。<sup>6</sup>科学的に生きることにとつては、<sup>7</sup>信頼に足る情報を集め、<sup>8</sup>真摯に考える、そのことが唯一大切なことではないかと思う。その考えが正しいか間違っているかは、厳密に言えば答えるのない問い合わせのようなものである。それが真摯な営みである限り、様々な個性を持つた個々人の指向のまま、生物の遺伝子変異のように、ランダムな方向を持つたものの集合体で良いのだ。

そういった様々な方向で進む人々の中から、より適したやり方・仮説が生き残り、次の世界を担っていく。それが生きている「科学」の姿であり、職業的科学者だけでなく、すべての人がその生き様を通して参加できる。<sup>9</sup>人類の営み』ではないかと思うのである。

(中屋敷均『科学と非科学 その正体を探る』講談社より)

- ※ 1 知見：知識や見識。
- ※ 2 evidence-based medicine (EBM)：科学的根拠に基づく医療。
- ※ 3 臨床判断：医療分野の現場における判断。
- ※ 4 『ネイチャード』：世界的に権威のある科学雑誌のひとつ。
- ※ 5 塗師<sup>ぬし</sup>：塗細工、漆器製造を仕事とする人。
- ※ 6 バグ、あるいはセキュリティホール：安全管理上、重大な危険をもたらす欠陥や不具合のこと。

※ 7 寓言：意見や教訓を含んだ、例え話。

※ 8 これまで何度も書いてきたように：本文より前の部分を指す。

※ 9 ポール・カール・ファイヤアーベント：一九一四年～

一九九四年。オーストリア出身の科学哲学者。  
伽藍<sup>がらん</sup>：寺院など、僧侶たちが修行するところ。

問一 線あくおのひらがなを漢字に直しなさい。

問二 線1 「いわゆる権威主義」について。

(1) これによつてもたらされるものの説明として、最も適當なもの

のを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 科学的知見は、権威に認められることではじめて確かなものとされるため、人々には、仮説の正当性を第三者である権威に保証してもらおうとする傾向が生じる。

イ 人々が事象の仕組みや意味、それに関する仮説の正しさの度合いがわからないとき、自力での判断を止め、権威が下した判断に従おうという動きが起こりうる。

ウ 科学的知見の確度について理解することは難しいため、人々は権威によつて正しい判断が下されるまで、自分の判断が正しいかどうか、不安を感じやすくなる。

エ 科学が証明した知見の確かさに懷疑的だつたり反感を抱いたりする人々には、権威が下した判断を根拠としてくつがえ

そうとする心理が働いてしまう。

(2) こうした「主義」によって、科学はどのようなものになると考えられますか。文中の――線 a ~ dの中からあてはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 線2 「どこか拭い難い」とあります。この表現にあらわれている筆者の考え方として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 明確に証明できるものではないにせよ、存在しているとしか思えない、ということ。

イ 自分だけでは物事の確かさを信じられないとき、何かにすがって信じたくなるものだ、ということ。

ウ 自分の考えが他の人に信じてもらえるだろうか、という不安がつきまとう、ということ。

エ 社会に悪影響を及ぼす可能性が、ないとは言い切れない、ということ。

問四 線3 「聖典の寓言」とあります。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人々を魅了してやまない、美しい表現を持つもの。

イ 絶対的な価値があり、疑いを持つことが許されないもの。

ウ 高度に専門的だが、一般の人々にも十分理解できるもの。

エ 論理的な完成度の高さに加え、柔軟性もあわせ持つもの。

問五 線4 「科学の生命力。を蝕む」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 真理を探しつづけるという科学の本来のあり方が崩れていくことによって、権威主義者が科学を利用して自らの権威を誇ることもまた不可能になってしまう。

イ 自らの誤りを認め、より確度の高い仮説を構築するという、科学が今後も社会への影響力を持ち続けるために必要な姿勢が、科学者自身によって損なわれる。

ウ 既成の知見にとらわれることなく、自らの理性を頼りにこの世界の実相を解き明かそうと、個々の研究者たちから失わせてしまう。

エ 現実の事象についてたえず探求し、知見を更新していくとともに、科学を非専門家にもより理解しやすいものにしていこうとする研究者たちの努力を無にしてしまう。

問六

——線5「科学には（）バザールが似合う」とあります、が、

それはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを  
次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 科学には、知見の確度の高さを保証するために特定の権威に頼る傾向があるが、多様な人々が集まり、個々に理性を働かせつつ世界の解明に向けて真摯に思考する点では、「人類の嘗み」という呼び名がふさわしい、ということ。

イ 科学には、物事を一義的に意味づけ、自らを権威づけるという側面はあるが、一方では多様な指向を持つ人々が、既成の知見や権威にとらわれずに、各々が世界の意味や仕組みを追究していくという自由な側面もある、ということ。

ウ 科学には、権威が認め、あるいは構築した学説にすがりつく必要はなく、多様な指向を持つ人々の集団において個々が理性的かつ真摯に思考する中で、より信頼に足る知見が自由と選ばれるというあり方が望ましい、ということ。

エ 科学には、権威が確立した学説を妄信的に支持しなければならない理由ではなく、様々な個性を持つ人々が集合し、思考の方向を統一しながら知見を蓄積することで、世界の姿を解き明かしていくあり方が理想的だ、ということ。

問七

——線6「『人類の嘗み』」とありますが、ここに込められた

筆者の思いを説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 科学的知見に関する理解を深めるためには、専門家に限らず、一人一人が、分かっていることと分かっていないことの区別を明確にしていくことが前提となる、ということ。

イ いかに確度の高い科学的知見であっても、万人にとって正しいものではなく、論理的な根拠を持つ以上、それが論破される危険性があることをよく理解するべきだ、ということ。

ウ 今「正しい」とされる科学的知見も、確度が高いだけで絶対に正しいものではないため、実際のありようを追求するすべての人々の活動に真の終わりはないはずだ、ということ。

エ 科学的知見はあくまでも仮説に基づくものであり、その仮説が絶対の正しさを持つものではない以上、すべての人は謙虚な態度で研究に臨まなければならない、ということ。

## 二

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

### 【登場人物】

- ・鶴見希衣：ながとろ高校カヌー部部長、二年生。利根蘭子をラ  
イバル視し、大会上位を目指す。
- ・天神千帆：同副部長、二年生。小学校時代から続く希衣とのペ  
アは周囲からも期待されていた。
- ・湧別恵梨香：実力に恵まれた一年生部員。
- ・利根蘭子：世界大会にも出場する他校の有名選手、二年生。

練習帰りの電車内で、「希衣」は自分よりタイムの早い「千帆」が後輩の「恵梨香」とペアを組めばインターハイ優勝を狙えると言い出し、「千帆」は動搖します。一方「恵梨香」は、フォームの似ている「希衣」とのペアを希望し、「千帆」も涙ぐみながらその方がいいと言います。そしてためらいながらも「希衣」の夢は、私にはちょっと重すぎるよ」と伝えました。その言葉は、電車から降りても「希衣」の脳裏をさかんに巡っています。

「希望ないなら蕎麦でいい?」

千帆の提案に、希衣は否定も肯定もしなかった。どこへ行くかを決めるのは、普段は希衣の役割なのに。着替えの入ったスポーツバッグが重く肩に伸し掛かる。皮膚を締め付ける微かな痛みに、希衣は一度息を吐いた。それを肯定と取ったのか、或いは無理やりにでも連れて

いくつもののか。千帆はこちらを振り返らない。

「いつものとこでいいよね？ 私、あつたかいお蕎麦が食べたい」

重ねられる言葉は、まるで独り言のようだ。返事をしなければと思うのに、口を動かすのがひどく億劫（あつら）だった。胸の奥が、空虚だ。折れてしまつた心が、立ち上がるこことを拒否している。

開けた道を歩いていると、こぢんまりとした建物が見えてきた。古民家に似た佇まいだが、その扉の前には墨で書かれたメニュー表が張り出されている。千帆と希衣の、いつもの店だ。

「いらっしゃいませー」

扉を開くと、中から若い女店員の声が聞こえた。リフオームされた内装は今風でありつつもレトロな空気感を残している。隅にある二人席に案内され、千帆はスポーツバッグを床へと置いた。お洒落な店内で、ジャージ姿の二人は浮いていた。

「すみません。私、大根のみぞれ蕎麦に天ぷらトッピングで。希衣は何にする？」

沈黙を埋めるように、千帆は饒舌（じよせつ）だった。エプロン姿の店員が、にこにこと愛想よくこちらを窺つている。すっかり硬直していった喉を無理やりに開くように、希衣は大きく咳払いする。

「……これで」

ざるそばの写真を指さすと、店員は「かしこまりました」と大仰な仕草で領いた。丁寧すぎる敬語で、店員は注文を繰り返す。

「以上でよろしかつたでしょうか？」  
はい、と笑顔で応じる千帆を前に、希衣は唐突に目の前の机をひとつくり返してやりたい衝動に駆られた。何もよろしくない！ そう叫ん

で、立ち上がって、千帆の肩を揺さぶりたい。

だが、その欲求は行動へ移す前に死んでいた。千帆がこちらに向き合つたからだ。真つすぐな視線をぶつけられ、希衣の身体は強張った。沸き上がつていた怒りは霧散し、両肩に募るのは後ろめたさと虚しさばかりだ。

「相変わらず希衣はざるそば好きだね」

店員は既に、別の客のところへ移動していた。千帆は両手を机の上に揃え、お行儀よく椅子に座っている。しゃんと伸びる背筋が彼女の正当性を裏付けているようだ、希衣は眉間に皺を寄せた。

「……千帆こそ、毎回大根おろしじゃん」

彼女は目を瞠り、それからゆつくりと口元を綻ばせた。安堵が表情に滲み出ている。

「だって、美味しいんだもん。練習終わりはあつたかいほうが体にいいかなつて」

「冷たい方が喉にするつと入りやすいでしょ」

「そうだけど。私はあつたかい蕎麦が好きなの」

「うどんはざる派なのに？」

「だつてざるうどんの方が美味しいんだもん」

一度口を開いてしまえば、堰を切つたように会話は流れた。ぎこちなさを塗り潰す、作り物のいつも通り。<sup>2</sup> 希衣は一つに結わえた髪の先端を二方向に引っ張ると、無理やりにカヌーテールの根本を締め付けた。

「千帆はさ、カヌー部作るの、なんで付き合つてくれたの」  
「今更その話？」

「今だから、この話なの」

「一年も前の話だよ」

「言いたくない？」

「そういうわけじゃないけど、」

千帆は唇を軽く噛む。短く切り揃えられた爪先が、机を引っ搔くのが見えた。

「覚えてる？ ながとろ高校に行くつて千帆が言つた時のこと」

「覚えてるよ、この店だつたもん。希衣は反対だつたよね、最初」「でも、結局最後は私も受けることにした。……私、ちゃんと聞かなきやいけなかつたね。もつと早くに」

「何を？ 私がながとろ高校に決めた理由？」

「そうじやなくて、千帆がカヌー部を統けてくれた理由」

疲労を蓄積した背中は、気を抜くと勝手に丸まつている。ブラジャーのワイヤーが鳩尾辺りに食い込んで痛かった。ジャージの上からブラを摘まみ上げると、それだけで呼吸が少し楽になる。

「ながとろに行くつて言われた時点で、薄々は気付いてたんだ。千帆がカヌー部を辞めたがつてるつて。でも、千帆つて優しいから。私に付き合つてくれたでしょ？ ながとろにカヌー部を作りたいつて私が言い出した時も」

「それは、私もカヌー部があればいいなつて思つたからだよ。優しい

とか、そんな理由じゃない」

「千帆は、カヌーが好き？」

「好きだよ」

でも、と千帆は言葉を続けた。こちらを映していた両目が、よそよ

そし  
く逸らされる。

「希衣とは好きの種類が違うかもしれない」

希衣にとつて、カヌーは自分という人格を構成している一要素だ。幼い頃から染み付いた習慣を好き嫌いで捉えることは、今ではもう難しい。計算が速い、歌が上手い。それと同じく、人より少し秀でた武器。

ながとろ高校でカヌー部を作ろうと思つたのは、自分の武器が無くなるのが怖かったからだ。何年もの努力の積み重ねを披露する場所が忽然と消える。その現実に、希衣は耐えられなかつた。

「希衣はさ、なんだかんだ言つて大会が好きでしょ？ 結果を出したら、これまでの努力も全部報われると思つてる」

「そんなの、みんなそうでしょ」

「だから私は、高校じゃカヌーを辞めようと思つたんだよ」

告げる声に抑揚はなかつた。渴く喉を潤そうと、希衣はグラスに口をつける。

片方の手で自分の腕を押さえつけ、千帆はすっと鼻から息を吸いこんだ。吐き出されたため息の中に、掠れた本音が溶けている。

「例えばさ、野球をやつてる子は全員プロ野球選手を目指さなきやだめなのかな。お稽古でフィギュアスケートをやつてる子は、みんなオリンピックが目標ですつて言わなきやだめ？ ただ趣味で楽しむつて選択肢は許されないの？」

「それは、」

「カヌーは好きだけど、一番を目指し続けるのは疲れるよ。希衣は私をすごいやつだって期待してくれたけど、私は絶対に一番になりたい

とはどうしても思えないの。蘭子ちゃんに、私はなれない」

利根蘭子の名前を出され、希衣は咄嗟に口をつぐんだ。孤高の女王の異名を持つ、日本女子カヌースプリント界の絶対王者。

千帆の肩が落ちる。その両眉がへにやりと力なく垂れ下がつた。

「ごめんね、ここにいるのが私で」

唇を緩め、彼女は笑みらしき表情を浮かべた。伸びる首筋が、否応なしに視界に入る。そんな顔をさせたいわけじゃない。そう、思った言葉を口に出来れば良かつたのに。喉奥に詰まる熱を誤魔化すように、希衣は自身の手の甲を抓つた。皮膚に爪を突き立てるときくんと間延びした痛みが走つた。

「私は、千帆が利根蘭子だつたらつて思つたことなんて一度もないよ。千帆以外の誰かと組むなんて想像したこともない」

「だろうね。けど希衣は、私を恵梨香ちゃんと組ませることは考えた。いつもそうだね。希衣は、私が一番になることばっかり考えてる。いつも希衣自身のことは後回し」

「別に、そんなつもりはないけど」

「でもずつとそうだつたよ。私はそれを分かつて、それでも希衣を手伝つたの。二人だけのカヌー部だつたらそこまで必死に活動するともないだろうし、それで希衣と一緒にいる理由が出来るならいいかなつて、そう思つた。ずっと自己中だつたんだ、私。だからね、いいんだよ」

「いいって何が？」

「希衣はもう、私から解放されていいんだよ」

で目元を押さえると、皮膚の薄い部分がひんやりと湿った。

「千帆は本当に後悔しない？ 私と湧別さんが組んで」

「しないよ」

「……そう。なら私、次の大会はあの子と出るね」

5 「もう、君とは漕がない。何故なら、君がそれを望まないから。

熱を帯びる瞼を、意図的に緩慢な動きで開く。ちつとも傷付いてなんかいない、と相手に訴えるように。

「なんか、お腹空いたやつたね」

腹部を擦り、希衣は口の両端を釣り上げた。木製の椅子の背もたれに手を掛け、腰を捻るように店奥の様子を窺う。先ほど注文を取つてくれた店員が、こちらに器を運んでくるところだった。

漂う出汁の香りが食欲をそそる。希衣は姿勢を正し、正面から千帆に向き合つた。視線が合うことを避けるように、彼女はそつと目を伏せる。

「ねえ、千帆」

「なに？」

6 「料理、取り換へつこしない？」

予想外の提案だったのか、千帆はきょとんと眼を丸くした。

「え、なんで？」

「なんでも」

無理やりに言い切り、希衣は店員から大根おろしのたっぷり入つた蕎麦を受け取つた。千帆は困惑したように首を傾げていたが、それで店員がざるそばを目の前に置いたことに対し、素直に礼を言つていた。

た。

いただきますと合掌し、希衣は上下に割りばしを割る。レンゲを汁の中に沈めれば、仄かに白濁したスープが中へ溜まつた。熱い液体を、恐る恐る口内へ流し込む。カツと燃えるような熱は食道を伝い、やがて胃の中に納まつた。上品な旨味がじんわりと舌の奥に広がつていく。

「それ、美味しいでしょ」

得意げに告げる千帆は、わさびをつゆへと溶かしている。柔らかめにゆでた蕎麦を箸でつつきながら、希衣は自身の口端を舐める。先ほど飲んだスープのせいか、唇は少ししょっぱかった。

「うん、すごく。体があつたまるつて感じ」

「でしょ？ 私、ここのお店じやそのメニューが一番好きだから」<sup>7</sup>

「知つてるよ。千帆が好きなものは、大体

テーブルの横に置かれた七味を、蕎麦の上に振りかける。うずらの卵を割つていた千帆が、空いた手をこちらへ伸ばした。

「私も七味欲しい。頂戴」<sup>8</sup>

「あ、ごめん」

小さな瓶が、希衣の手から千帆の手へと渡つていく。白く立ち上る湯気を、希衣は息で吹き飛ばす。クリアになつた視界で、千帆の前に置かれたつゆがすっかり赤くなつていて見えた。

「希衣が謝る必要なんてないのに。今のは私が礼を言うべきじゃない？」

「どっちだつていいよ」

「そう？ 大事なことじやない？」

「……これ、七味の話だよね？」

「そうだよ。七味の話」

ふふ、と軽やかな笑い声が千帆の鼻から抜けて行く。向けられる眼差しの穏やかさが、なんだか無性に恐ろしかった。掛け違ったボタンみたいに、二人の間にある感情が少しづつズレているような気がする。漠然と感じた怯えを誤魔化すように、希衣は音を立てて麺を吸い込む。ステップの上に溜まつた七味が気管に入つて、希衣はそのまま激しく噎せた。

そんなに急がなくたつていいいんだよ、と千帆は呆れたように笑つた。

(武田綾乃『君と灘へ なごどる高校カヌー部』新潮社より)

問一　——線 a 「億劫だつた」・b 「堰を切つたように」とあります、

本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 億劫だつた

ア つまらなくてわざわしかつた

イ 悲しくて気乗りがしなかつた

ウ 不愉快でやる気が出なかつた

エ 面倒で気が進まなかつた

b 堰を切つたように

ア 我慢していたことをあきらめたように

イ やめようと思うがやめられないように

ウ つぎつぎと素早く連続するように

問二　——線1 「彼女は目を瞠り——綻ばせた」とありますが、この時の「千帆」の説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 希衣が苛立ちを我慢して自分の会話にメニューの話で答えてくれたことに感謝し、これならばペアは解消になつても友情は少しも損なわれないと安心した。

イ あえて明るく振舞つている自分に希衣が話を合わせてくれた気遣いが嬉しく、自分も希衣に対しても正直な気持ちを伝えようという決心がついた。

ウ いくらしゃべりかけても返してこなかつた希衣がようやく言葉を発したことに驚き、気まずい雰囲気が和らいでいつものような一人に戻れるのではないかといほつとした。

エ 希衣の怒りが自分と店員との無神経なやりとりに起因していたのだということに気が付き、この後は機嫌が直るだろうと思つて気持ちが落ち着いた。

問三　——線2 「希衣は一つに——根本を締め付けた」とあります  
が、この時の仕草に「希衣」のどのような気持ちがあらわれていますか。簡潔に書きなさい。

問四 線3 「こちらを『逸らされる』とあります、この時の「希帆」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 希衣がカヌーに対する自分の気持ちを全く聞き入れてくれなかつたことを、以前から腹立たしく思つていたので、どうせ話しても分かってくれないとあきらめた。

イ カヌーに取り組む気持ちの違いをはつきりと説明する機会だと思いつつも、希衣の考え方とは相いれないものであると分かっているために言いづらかった。

ウ 大会結果よりも二人の友情を大事にしたい、という自分の考えを伝えようと思いつつも、そのことによつて希衣までもが目標を失うのではないかと不安になつた。

エ 自分を「優しい」と言つてくれる希衣に対して、今後ペアを組む意思がないことを告げても友達でいてくれるかどうか気がかりだつた。

問六 線5 「もう、君とは漕がない」とありますが、この時の「希衣」について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 千帆との会話により互いの間に距離ができてしまつたことを感じ、今まで続けてきたペアを解消する決心を固めようとしている。

イ ペアを組むことをはつきりと千帆に断わられたため、今後は恵梨香との新しいペアに向けて全力を尽くそうと心が定まつている。

ウ 千帆とのカヌーに対する考え方の違いを認識したことでの今までの友情も実は表面的なものだつたのかと思い氣落ちしている。

エ ペアを解消することになつたので、いつか千帆が誘つてくれるまで趣味でカヌーを楽しむ」とさえできないと思い、残念がついている。

問五 線4 「『』にいるのが私で」とあります、ここで「千帆」が言いたかつたことを補つたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 蘭子ちゃんのように意思が強くない私で  
イ 大会で一番を目指そうとしない私で  
ウ カヌーをやめようと思っている私で  
エ 蘭子ちゃんほど注目されていない私で

問七 線6 「料理、取り換へつこしない?」とありますが、この時の「希衣」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 練習後に温かい蕎麦を食べると体にいいという言葉を思い出し、自分も食べてみることで選手としての千帆の気持ちを理解しようと思っている。

イ 二人の間が気まずくなつてしまつたので、カヌーとは無関係な提案をすることだとおりあえず話題を変えてしまおうと思つてゐる。

ウ ペアを解消してしまった以上は、いつまでも一緒にいるわけにもいかないので、最後に千帆の好物を味わつてから別れようと思っている。

エ カヌーのペアは解消してもいつまでも友達のままでいたいと思い、メニューの交換によつて縛をつなぎとめておきたいと思っている。

### 問八

——線7 「知つてるよ。千帆が好きなものは、**大体**」と言つた時の「希衣」の様子の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 正式にペアを解消した以上、もう千帆とは今までのようになく分かれ合つてゐる友達でなくなつてしまふので、皮肉をこめて最後に「**大体**」と付け加えた。

イ 千帆が一位を目指そくとしなくとも、カヌーが好きなことはわかっているということを、「千帆が好きなもの」という言い方で伝えようとした。

ウ 親友の千帆のことはすべて知つてゐるつもりだつたが、カヌーに対する気持ちをきちんと理解できていなかつたという思いもあり、「**大体**」と付け足してしまつた。

エ メニユーに関しては知つてゐるが、その他は知らないこともあると思い、「千帆が好きなものは、**大体**」という言い方でこれからも教えて欲しいことをにおわせた。

問題文〈甲〉・〈乙〉を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

二 なお、問題文〈乙〉については設問の都合上、送り仮名や返り点を省略した部分があります。

〈甲〉

今は昔震旦<sup>※1</sup>の宋の代に韓の伯瑜といふ人ありけり。幼稚なりける時に、その父死にけり。

しかば、母と共に家にありて、ねんごろに母を養ふ間、伯瑜、少しのXある時には、母瞋りて、杖をもつて伯瑜を打ちて呵噴す。伯瑜、杖を負ふに、身痛しといへども、心に忍びて泣くことなし。これ、常の事なり。

しかる間、母すでに年老い身衰へて後、伯瑜を打つ時に、痛き事なし。しかるに、伯瑜、杖を負ひて泣く。その時に、母、このことを怪しんで、伯瑜に問ひていはく、「われ、年来、常に汝を打つに、杖を負ふといへども、汝泣く事なかりつ。しかるに今、何ぞわが杖を受けて泣くぞ」と。伯瑜答へていはく、「年来はわれ、君の杖を負ふに、身痛しといへども、能く心に忍びて、泣く事なかりつ。しかるに、今日の杖を負ふに、杖の当たる所強からずして、年来に似ず。これ、母の年老いて力の衰へて弱くなれるが故なりと思ふが悲しきによりて泣くなり」と。その時に、母、このことを聞きて、「わが杖を負うて痛んで泣くなりと思ふに、わが年老いて力の弱れるを悲しんで泣くなりけり」と知りて、母、伯瑜をあはれびかなしぶ事限りなし。これを聞く人、伯瑜が心を讀め感じけり。

〈乙〉

伯 瑜 有<sup>リ</sup>過<sup>アヤマチ</sup>其<sup>ハ</sup>母 答<sup>ムカウツ</sup>之<sup>ヲ</sup>泣<sup>ク</sup>母<sup>ハグ</sup>曰<sup>ク</sup>「他<sup>ハク</sup>日<sup>テ</sup>」  
罪 答<sup>ヲ</sup>嘗<sup>タラレバ</sup>ニ<sup>メリ</sup>痛<sup>ムコト</sup>今<sup>クハ</sup>泣<sup>なんづ</sup>何<sup>ヤト</sup>也<sup>ト</sup>「對<sup>ハテ</sup>曰<sup>ハク</sup>」「他<sup>ハク</sup>日<sup>テ</sup>得<sup>レ</sup>テ」

答<sup>ヲ</sup>Y

震旦<sup>シンドン</sup>…中国のこと。  
嘗<sup>タラレバ</sup>ニ<sup>メリ</sup>痛<sup>ムコト</sup>今<sup>クハ</sup>泣<sup>なんづ</sup>何<sup>ヤト</sup>也<sup>ト</sup>「對<sup>ハテ</sup>曰<sup>ハク</sup>」「他<sup>ハク</sup>日<sup>テ</sup>得<sup>レ</sup>テ」  
（『蒙求』伯瑜泣杖）

※1 震旦…中国のこと。

※2 瞋りて…かつと目を見開いて怒つて。

※3 呵噴…せめざいなむこと。

※4 杖を負ふに…杖で打たれたときに。

問一 線1「ねんごろに」とありますか、その意味として最も

適当なものを次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア 仲良く

イ 手厚く

ウ 長い間

エ 適度に

問二

Xに入る言葉として最も適当なものを問題文〈乙〉の中から漢字一字で探し、抜き出しなさい。ただし、送り仮名等は不要です。

問三 線2 「母、伯瑜をあはれびかなしぶ事限りなし」とあります

が、その解釈として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 母は伯瑜に對して健気に思い、かわいがることこの上ない。

イ 母は伯瑜に對して感心し、誇りに思つことこの上ない。

ウ 母は伯瑜に對して氣の毒に思い、悲しがることこの上ない。

エ 母は伯瑜に對して落胆し、情けなく思うことこの上ない。

問四 □Yに入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 有

イ 宜

ウ 未

エ 即

問五 線3 「今 泣<sup>クハなんソ</sup> 何<sup>やト</sup> 也」とありますが、これを現代語

訳しなさい。

問六 線4 「対」について。

(1) この言葉と同じ意味を表す言葉を問題文〈甲〉の中から探し、抜き出しなさい。

(2) 母から笞打たれた伯瑜は、なぜ泣いたのですか。その理由を

問題文〈甲〉から十六字で探し、最初の五字を書きなさい。



〔国語〕

解答用紙（高校第二回）

受験番号
------

氏名
----

得点
----

一

問

一  
④

かい  
そう

(イ)

り  
て  
ん

(ウ)

と  
う  
さ  
く

(エ)

し  
さ

(オ)

び  
じ

問

二  
(1)

--

(2)

--

問

三  
□

--

問

四  
□

--

問

五  
□

--

問

六  
□

--

問

七  
□

--

二

問

一  
a  
□

b  
□

問

二  
□

三

問

六

(1)

問

四

問

一

問

七

問

四

問

三

(2)

  
  
  

問

五

問

二

問

三

問

八

問

五

問

六